

No. 492【2022年2月4日配信】

筒井にある「だ志ゑ一之碑」(担当:村上亜弥)

こんにちは。歴史資料室の村上です。市民図書館は1月24日から臨時休館中ですが、歴史資料室では公式フェイスブックページを通じて青森市の歴史に関する情報発信を続けています。現在は「青森市内石碑めぐり」というテーマで記事を投稿しています。

そこで、今回は筒井にある不思議な名前の石碑をご紹介します。それは「だ志ゑ一之碑」という石碑です。石碑の表面には「だ志ゑ一之碑」という文字が、裏面には丹下謙吉という人物が記した文章が刻まれています。その文章から「だ志ゑ一(ダシエー)」とは馬の名前であることがわかりました。



だ志ゑ一之碑(表)



だ志ゑ一之碑(裏)

丹下は愛媛県出身で、駒場農学校(東京大学農学部の前身)で獣医学を学び、岩手県や宮内省に勤務したのち、馬の改良や繁殖などの業務を担う国の機関・馬政局の馬政官となった人物です。優れた相馬眼そうまがん(馬の能力を見る目)を持つことから「馬の丹下」とも呼ばれました。

明治39年(1906)、丹下は馬を購入するため、南澤時義(奥羽種馬牧場〈現七戸町〉の場長を務めた人物)とともに欧米へ派遣されました(明治39年7月4日「馬政官丹下謙吉外一名欧米各国へ被差遣ノ件」国立公文書館デジタルアーカイブ)。碑文によるとこの時、丹下は青森県から種馬選定の依頼を受け、フランスのカーン市でダシエー号を購入したといます。ダシエー号は黒鹿毛くろかげのアンゲロノルマン種(フランス原産の馬)で、年齢は4歳でした。



丹下謙吉
『今治郷土人物誌』
国立国会図書館デジタル
コレクション)

では、なぜ青森県は種馬を購入したのでしょうか。背景には明治35年に県が打ち出した産馬事業の方針がありました。県は県内各地域における馬の改良目標を定め、在来馬と海外から輸入した馬をかけ合わせるによって馬の改良(大型化)を進めようとしていました。当初は各地域の産馬組合に補助金を交付していましたが、明治39年から同44年までは県が毎年2頭ずつ海外から種馬を購入して産馬組合に貸し付けました。そのうちの一頭がダシエー号だったのです。

明治39年12月21日付の『東奥日報』には東津軽郡産馬組合に対してダシエー号の貸し付けが許可されたことが記されています。記事には「東郡ハ他郡に比し斯業に熱心且つ大いに改良の見込みあり」とあり、産馬組合の意気込みが感じられます。

碑文によれば、ダシエー号を導入して馬の改良を行った結果、東津軽郡では良い馬を生産できるようになったそうです。歴史資料室が所蔵する大正8年の資料にも「県有種牡馬ダシエー号当組合ニ貸下以来成績良効」という記述がありました。

大正12年(1923)にダシエー号は亡くなりますが、その功績を後世に伝えるため、大正14年に石碑が建立されたのです。

※今回の内容は『青森県史 資料編 近現代2』(青森県 2003年)、『今治郷土人物誌』(愛媛県教育会今治部会 1932年)などを参考にしています。